

八月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

一少女きみ

杜 沢 光一郎 埼玉

いのち尽き臥しゐる妻を置きざりに平成は令和へと時押し移る
占領統治下の奄美に育ち体操の選手たりにし一少女きみ
君の骨を両手に抱き戻る道、愴然と木々の青葉煌めく

脳梗塞にて六年間無表情なりし君が遺影の額の中に羞しげに笑む
連子窓ひらけば今日より五月なる寺院のみづならの若葉目に沁む

ジャン・ジャンセンの皿 田 中 愛 子 埼玉

春はやて吹くゆふぐれに気づきたり友のうなじの小さきほくら
四辻のはくうんぼくが咲きたるを告げてみじかく電話は切れぬ

春宵に夫言ひたり葱ぬたはジャン・ジャンセンの皿に適はぬを
けふ令和元年となる メーデーのニュースを聞かぬ五月一日
起きぬけの白湯すすめる六十を過ぎたる人はと前置きされて

生まれた家

橘 芳 岡 新 潟

無心、無我に縁なく過ぎて無力感抱きしままに僧を辞めたり
寺出でて念持仏なく住む家に子らの家族の写真を掲ぐ

くらしたる寺出でて住む父母の家をふるさととして子ら帰りくる
父さんの生まれた家はと孫が問ふ父さんの家はわが捨てし寺
僧辞めし身にはあれども知り人のお通夜の席で念仏申す

令和の闇

大 野 英 子 福岡

につしやうき掲げる家が二軒ある旧問屋街五月一日
ピンクチラシ禁止の張り紙さへ虚し汚れきつたる電話ボックス
連休中のオフィス棟はしづまりて長い廊下がますます長い
若葉じよじよに山をおほひて景明るし令和の闇をどこかに隠し
をりをりに聞こえる裏の母親の叱りごゑときにエスプリ利かせ

☆

☆



水鳥 晴子 兵庫

ひとりして聖天の坂のぼりゆき風に真赤き夕陽に近ひぬ
山のみづ引く側溝に落ち散りて紅白かさぬ五月つつじは
はづみにてカッパを倒し隣席の人の衣服をいたく濡らしつ
「大丈夫」と言ひくるる人の膝を拭く にんげんぼつぼつ終らむ感じ
うしなひしもの多きをおもへるに大阪なまりつつひの身に添ふ

武田 弘之 神奈川

薔薇園に薔薇見て巡る人みなを輝かせをり幾万の薔薇
蔓薔薇のアーチは高し勢ひて水噴き上げる噴水の辺に
来て巡る令和初めの薔薇園にプリンセスミチコの札の薔薇なし
薔薇園に集へる人ら嘆美して薔薇を見薔薇を見る人を見る
薔薇園の一隅占めてアカンサス咲き群がれり丈みな高く

高野 公彦 千葉

この古き短歌を捨てず、短歌から捨てられもせず、短歌を灯とす
有馬の湯その赤き湯に定家ひたり七百年後われもひたれり
俊成は定家を守り定家また慈しみたり嗣子為家を
猫好きの定家は猫をふところに入れて愛でにき妻の猫なれど
好評噴々でもあるまいが嬉しけれ「明月記を読む」二刷となりぬ

仲 宗角 三重

辛うじて耐へつつ一日在りたれば死者の待つがにゆふぐれが来つ
またぐらに尻割り込ませてくる幼よこれしままの眠き顔して
みづうみに吹きある風は岸ちかき梅のはやしの花にひかりつ
風呂敷に囹籠ひめ少年がけもの道なる檜山しのび来
気狂ひしシューマンの曲もれきこゆ居眠りてゐしイヤホーンの耳

奥村 晃 作* 東京

首都圏にノライヌ居ないノラネコが居なくなる日も来るであろうか
われ見るや身を丸めつと逃げ行きしノラネコよいたくヒトを恐れて
庭隅に子を産みし猫を竹ぼうき振り回し即追ひ払い
パリケード築きノラネコの寄りそうな土以外の個所全て封鎖す

森重 香代子 山口

難民の船が相継ぎ来るときに列島人われら如何に処するや
あたらしく一人を迎へ墓原はしづかなる陽の照りわたりをり
帰り路の径辺に摘みし草の花ガラスに飾りひとり食事す
「青竹を売って生計を立てし世のありたり祖母の生きてありし世
栄誉市民となりたることも知るなくて厨子にしづけし夫の面輪は
蹲り廻りの草を抜きしかば田圃ひとつ庭にのこれり

日影 康子 富山

劔岳の春雪とけて長次郎雪深しろじろ太くわが家より見ゆ
畑主に会ふことなげど畑つねに整ひてけふは茄子苗植わる
春ま昼バスの窓より見て通る高月町しあわせ通り海照りに沿ふ
土踏めずなりし老夫を樂します屋根越えて伸びしみづき白花
元号の令和と変りはじめての十三夜の月天心に牙ゆ



狩野 一 男 東京

兄逝きし六十八が惻々として身に迫る息ぐるしけれ
令和来て二日目六十八になり令和のうちに居なくなるわれ
うつくしい五月のばらをつくづくと見て立つわれや六十八歳
改元にともなふ十連休済みてたちまち暑き五月となりぬ
風薫る夕吉祥寺、ガード下にありし豊後よきみ今いづこ

古屋 祥子 群馬

宮里 信輝 神奈川

利根川を越えてこれより下野ぞ、トシネルに次ぎてトシネルがまた
われの知る地名よ、五十部町も、助戸もそして大岩も読む
佐野の街にやうやう着けり友人に迎へられいつもの定食とする
やまひ得て一人は倒れ、脚効かぬわれの介護は慣れし車椅子
齢老けてまだまだ続く集りはしんそこみんないい人ばかり

影山 一 男 千葉

岡崎 康 行 新潟

はつなつの空のひかりへ翔びたてり神田生まれの燕の三羽
来年もこの巢へ来るのを待つてゐる待つことだけが今できること
帰りなむいざみんなみの暮しへと 喜びの空燕は翔る
神保町古りたるビルの一画に命宿りて桐の花咲く
老いし眼に五月のひかり眩しくてあどけなき児の右手を握る

桑原 正 紀 東京

小島 ゆかり 東京

イヌノフグリとオオイヌノフグリの区別などつかぬともよし春日が笑ふ
つながつてゐたい症候群の若者が群れつつふかき孤独を飼へり
街に群れネットに群れてゐなければ息絶えてしまひさうな若者
孤独感つる夜ふけは海底の虎魚のすがた想ひみるべし
孤独とは負ならずまして悪ならずしづかに己かへりみるとき

星と言ひ泉下とも言ひてにんげんはつひの行くさき考案りきたりぬ
家屋燃え人の亡くなりしニュース聴くみんな聴きつつ朝食を摂る
斧の打つ音のひびきは大杉のいのちの余韻としてはるかなり
ひげそりを省略して今日はことなきいつか来む全て省略する日
八十のわれが凍て雪踏むみちの遠くはもはや夢の雪ふる
母の食ささやかに焚く春暁をノートルダム大聖堂燃え上がりたり
大聖堂火災のニュースありし日のごはんのしろいひかり怖ろし
貧困の子どもを救ふ金ならず富豪の寄付金一千億円
ふらんすはなほ遠けれど春空へめらめらと発つ鴉の群は
月あかあかこの母とまたこの孫ともうしばらくを連れ立つ此岸

木 畑 紀 子 京 都

連翹のうつむく花になかなかにとまれば黄蝶はホバリング中大根も葎も穫れねどハナダイコン、ハナニラのむらさきはうつくしくローバーの白玉群るる野にボンと少年野球の球が飛び込むたんぼの野がクローバーの野に変じ青葉聞へとさそふ径あり遺伝子にゑがかれてゐる設計図たがふるものを神とおもはむ

島 田 暉 神奈川

眼も耳も衰へたりし老の身に櫻若葉の命かがやく
胸底に菜の花畑を秘め持てり蝶の舞ひきて老を忘れる
わが裡に育む鳥を飛び立たせ春空深くさへづらせたし
地下駅の長きエスカレーター昇り次ぎわが運命を生きゆくごとし
結婚をしてからすでに五十年夫婦の余生即かず離れず

大 松 達 知 * 東 京

こころづもりと書いたはずだがあらいやだ心算と画面にありぬ
どのヘンが悪かったのかアリガトのひとつすらも妻を怒らす
差しつづけなければいずれ失明する。(いずれ)が死より先に来るなら
仏壇をいずれはここに置くのかないまはワインの並びたつ角
やつぱりさ、ヘンだと思ふ。メキシコのプロッコリーがここにあるのは



田 宮 朋 子 新 潟

春真昼ひんやりとした本堂にひびく法話は耳根じこんに徹る
あかねさす光へ伸びる芽のごとく耳は聞くべき言葉へ向かふ
むらぎもの心の奥の霽はらふ言葉に出会ふ言葉はふしぎ
裏山のうぐひすのこゑ聞いてゐる堂の向拝むかひの段にすわりて
水檜の梢のうへは五月晴れば真砂の星がめぐらむ

津 金 規 雄 神奈川

この春の長き花どき見納めに訪ふも水辺の君住む街を
ゆく水に遠き荒川沖駅もたちまちに過ぐ特急「ひたち」は
「マイ・フェア・レディ」のへ君住む街を想ひ出す雲なき春の空を見る時
木の花が白く縁取るみづうみの水ささやけり風立つ真昼
待ち合はす夕べのカフェの窓の外を行く人あはく孤翳をまどふ

小 山 富 紀 子 京 都

梅原氏の「天衣無縫」の書に出会ふ緑深まる梅雨晴れの町
梅原流「天衣無縫」の書は真中見事外せり無縫良きかな
門の外の山椒を摘めばなつかしと工事場へ行く人ら寄り来る
六十八そんなに早い死やないね萩原健一同い年やね
わが逝きしのちにさかりをむかふるむ小さく細き銀のさくら木

清 水 正 子 神奈川

歌会のながれで寄りし掃部山公園かものやまゆふべ匂やかに花明りする
いにしへの人が挿頭にせしさくら魔除けのさくら、あなにやしさくら
さくらには花喰鳥がふさはしもびると鶉ひよこの飛びこぬものか
美妓のごとさくら侍らせ銅像の井伊直弼は横浜港みなとみてゐる
さくら咲きさくら散るなり平成の終る四月はわが生まれ月



小嶋 一郎 佐賀

日に三度くすり飲むこと忘れても固より罪を被ることなし
ひげ剃りを六十余年も続けるて今朝はあやまち血を滲ませる
目ぐすりを注すに邪魔する天井の蛍光灯の二本のひかり
母の日の妻と父の日のわれに他人行儀の子がメール呉る
殺されにゆく豚二頭軽トラの荷台で勇みゆまりを放つ

後藤 美子 北海道

退位による改元なれば賑はしき平成をはりの夜を早寝す
令和元年明けゆく空にかへるでの若葉かがよふ待まんか明日を
月めくり島原城の桜より能登千枚田になり涼風わたる
ニュアンスも含みもあらずAIに格付けされるスコア社会は
わがおもひ見透かすか次々にあらはるるパソコン画面の広告コーナー

福士りか 青森

病院の売店に旅の雑誌あり立ち読みの痕すこし湛へて
「当院の風呂は源泉かけ流し」なる病院のいづくにかあれ
「酸い」ことを「酸つけえ」と言ふ津軽弁おもへば親し「酸ヶ湯温泉」
混浴の千人風呂のおほらかさ女男ともどもに仏顔して
右をとこ左をみなの湯境は泉境に似てやすく行き交ふ

藤野 早苗 福岡

変化せしフランチェスコの櫛なりあまた花鶏をけふ寄らしめて
カニの身は食べぬわが猫カニカマを裂けば千里を翔ぶごとく来る
毛づくろひ終へて眠れる猫の舌しまひ忘れのものも色濁く
日体大(集団行動)神つてる synchronizeに住めるクロノス
休んだら動きはじめるのがこはい長期休暇なんて知らないわれら

風間 博夫 千葉

発酵食品沈菜、納豆常備せり便秘解消食品なれば

スーパーに本場韓国製キムチあれども買はず日本製買ふ
甘み辛みほどよき「牛角キムチ」よく見れば材料「韓国」だつた
腸によい発酵食品なれど妻あがなひきたること無し「キムチ」
キムチ入り容器の蓋を開けたれば「臭い!」と強いいふ妻あはれ

水上 比呂美 東京

藤の枝、藤の蔓さき延びてゆく延びゆく先に女郎蜘蛛の網
荒妙の藤の総状花序の身は重力ありてまつすぐに垂る
藤棚のうへに空あり空のうへまだ空ありて奈落めく 春
布紗子といふ美しい人を取りましたいつもどこかに縋帯巻いて
揺れるもの輝くものに惹かれたり闇夜にひかる藤の花ふさ

鈴木 竹志 愛知

老いといふ不如意がそつと忍び寄りある時ぬつと顔を突き出す
主待つ自転車群れ雨風におのが身晒しひたすら耐へる
主来ぬ自転車もあり襲ひくる腐蝕にあらがふ術なきままに
何故にリュックを背負ひコーヒーを飲みてゐるのかスターバックスに
詮索は無用と思へどコーヒーを飲むに背中のリュックはどうよ

原賀 環子 東京

星の夜に狩人のなかの狩人をおもへりダークマター・ハンター
さみしいといふ感情の羊たち春の睡眠中枢ふたぐ

縄文はあまりに遠し眠れない女をんなの時代たぐれば

ほら吹きのはらのごとしも友の名の(星野夢子)と(花山月子)
うつつにも架空にも浮く名であれど星野夢子の寡婦はげんじつ

水上 芙季 東京

十連休真中三日間名古屋旅テレビに映る若き美智子様

御朱印をいただく列は進まない。りんご飴食む親子を見てる
城なんて見てもつまらないんぢやない?さう言つて姉と行く名古屋城

この旅はのちのちどういふ位置づけの旅なんだらう楽しげな姉
にはか雨に熱田駅まで急いだこと傘さす写真で思ひ出す旅

松尾 祥子 東京

歯がための石いただきに來し神社しめ縄ゆらし若葉風ふく
みどりごと青葉影さす湯に浸るさなみのごとき喃語ききつ

子から子へ手足口病伝染し三家族みな全滅したり

豆ごはんお重につめてとどけんよ娘二人が寝こむ母の日
「幸せ」と母がいふたび背中よりうろこ剥がれて落つる寂しさ



第二刷

高野公彦著 平成30年11月刊 各巻二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

明月記を読む

コスモス叢書第一一四八篇

短歌研究社

— 定家の歌とともに 上下

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二―二―二五〇六

奥村晃作歌集

平成31年2月刊 一四〇〇円(税別) 送料三〇〇円

八十一の春

コスモス叢書第一一五〇篇

(株)文芸社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

第二刷

第34回詩歌文学館賞受賞 第17回前川佐美雄賞受賞

小島ゆかり歌集

平成30年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

六 六 魚

コスモス叢書第一一四三篇

本阿弥書店

著者住所 〒188-0001 東京都西東京市谷戸町二―八―二七―九一四

古屋祥子歌集

平成30年11月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

地 上 根

コスモス叢書第一一四二篇

柘 書 房

著者住所 〒371-0116 群馬県前橋市富士見町原之郷一―二―四